

第三十回「教育県長崎」振興大会 五島大会を振り返って

心身ともに健やかな「ばらかもん」よ、

明日の大きに「まいあがれ」



長崎県教育会 理事長 小田 恒 治

この数年、五島列島はテレビドラマの舞台として、全国にその名を轟かせている。洋々と広がる群青の海と心温まる島民の人柄、それを醸し出す五島弁の柔らかな響きが、多くの人の心の癒しや活力に繋がっているからであろう。去る十月二十八日、福江文化会館において、標題の振興大会を開催した。五島市での開催は実に十六年ぶりであった。

当日は、遠路、県副知事 浦真樹様、県議会副議長 山本由夫様、五島市副市長 久保実様、新上五島町総務課長 近藤徳利様、県教育委員会義務教育課長 岡野利男様をはじめ多くの来賓各位の御臨席を賜った。また、五島市はもとより新上五島町からも、現職の教職員や退職校長会の皆様等に参加いただいた。総参加者は四五〇名を超え、大ホールがほぼ埋まる大盛況であったことは、誠に嬉しく感謝に堪えない。「五島は一つ」という言葉が、まだしっかりと生きていて、実感した大会であった。

大会主題は、「夢・憧れ・志」にあふれる心身ともにたくましい子供の育成である。「夢や憧れや志」「希望」や「目標」と言ってもいいかもしれない。のない子供に、今日の学校教育の理念である「生きる力」は育まれないと考えるからである。特に、この数年、コロナ禍の閉塞した状況の中における生活を余儀なくされた子供たちの心に、「夢・憧れ・志」の灯を点すことは重要である。それは、子供の一番近くにいる親、教師の責任でもある。

また、副主題は、「地域ぐるみの教育を考える」である。これこそが本大会の不变の主旨である。学校（教職員）、家庭（保護者）、地域社会の三者が、それぞれの役割と責任を分担し、連携・協働しなければ、今後の教育（子育て）は十分な成果を挙げることができないことは誰もが認めるところである。まさに「地域ぐるみの教育」「社会総がかりの教育」が求められている。

開会に先立つアトラクションでは、久賀小・中学校の児童生徒の皆さんによる

「久が太鼓」の演奏が披露された。生き生きとした表情や掛け声が今も心底に残っている。この子供たちの全てが、「しま留学制度」による島外からの留学生であることに驚く。今日の学校教育の多様な在り方を、そして、本県及び五島市の特性を生かした本制度の取組を、今後も注目していきたい。

また、開会行事の中では、例年、善行児童生徒の表彰を行っている。今年も、ボランティア活動、社会貢献活動、郷土芸能の継承活動など様々な善行が表彰された。本会報に添付している別紙リーフレットを御覧いただきたい。

今年で八回目になる「私の『夢・憧れ・志』作文コンクール」の最優秀賞（県教育委員会教育長賞）の表彰と、その作文発表も開会行事の中で行われた。最優秀賞に輝いた長崎大学教育学部附属中学校第三学年の潮崎夏鈴さんが、「ぶどうの木に誓う夏」というタイトルで、亡き祖父への思いを胸に秘めて、獣医師へ向かう夢を力強く朗読した。（本コンクールの入賞作品集は本会報と併せて各学校等に二部配布する予定なので、回覧いただきたい。）

本大会の柱である「提言」（シンポジウム）と「記念講演」の詳細については後述に譲るが、「タフな心を身につけた子供」を育むための学校・家庭・地域社会の役割と連携の協議題の下、この数ヶ月間、周到な準備をして臨んでいた提言者の三名の皆さん、テーマに沿って論点を整理しながら、的確なコーディネートをしていただいた五島市の村上教育長様には、改めて深く御礼申し上げる。各シンポジストの具体的な提案、それに基づく熱心な協議、全てに真剣で心地よい緊張感が伝わってきた。「軟弱な五島っ子」にしてはならないという警鐘が心に残る。いずれにしても「タフな心」を身に付けることが、今後の予測不能な時代を生き抜くキーワードであることは間違いあるまい。

記念講演は、長崎県民が、否、日本国民全てが知っている元体操選手の内村航平氏である。この本県出身の世界的な体操選手が、その「夢を叶えるために」困難や挫折を乗り越えてどのように努力を積み重ねてきたのか、興味津々であった。淡々ととした語り口の中に、幼いときから体操一筋に打ち込んできた信念の強さと困難を克服する心身の「タフさ」とをひしひしと感じた。本大会には小中学生を初めとする子供の姿が目についたが、彼らの中に「努力」と「継続」の大切さが伝われば嬉しく思う。会后、控え室で内村航平氏と金メダルを下げた記念撮影する子供の姿が微笑ましかった。

改めて、「島部」での開催の意義を再確認した大会でもあった。「島部」に二〇%以上の学校があり、そこに学ぶ児童生徒がおり、そこに勤務する教職員がいる以上、「島部」での各種大会の火を消してはならない。

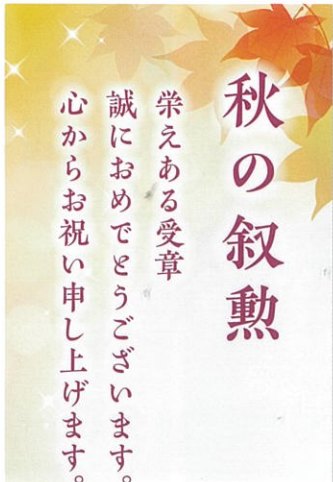


第三十回「教育県長崎」振興大会五島大会が、多くの関係の皆様方ご列席のもと、盛大に開催されますことを心からお慶び申し上げます。

長崎県教育会におかれましては、明治十八年の創立以来、教育の英知を結集した団体として、時代の要請に応じた諸事業を展開され、本県の教育振興に多大なご貢献をいただいております。小田理



長崎県副知事 浦 真樹氏



アトラクション「久が太鼓」  
五島市立久賀小中学校 児童生徒の皆さん

事長をはじめ、関係の皆様方に改めて深く敬意を表しますとともに、感謝を申し上げます。

さて、本県では、人口減少・少子高齢化が全国よりも早く進み、地域の活力低下が課題となっています。一方、昨今、映画やテレビドラマのロケ地としても人

瑞宝双光章

久保山 好明 先生

黒田 義和 先生



気を博する、ここ五島列島のように多様で豊かな自然、そこから生まれるおいしい食、そして、世界と交流しながら築いてきた歴史や文化、ホスピタリティあふれる温かい人と豊かなコミュニティなど、誇れる資源が数多く存在しております。

このようなるさと長崎県を誇りに思い、将来を担っていく人材を育てることが、本県のさらなる発展のために大変重要であると考えております。

そのため、県としましては、子ども施策を県政の基軸に位置付け、本県の子供たち一人一人が、安全安心に健やかに成長し、自らの能力と可能性を高め、社会で多様に活躍していけるよう、皆様と共に取り組んでまいりたいと考えております。

このような中、本振興大会において、「夢・憧れ・志にあふれる心身ともにたくましい子供の育成」を主題に、地域ぐるみの教育に焦点をあて、自らの将来に夢や憧れ、志を抱き、「命」を輝かせてたくましく生きる子供、ふるさとを愛しふるさとの発展に寄与する心を持つ子供の育成に取り組んでいただきますことは、大変意義深いことであると存じます。

ご参会の皆様方におかれましては、「教育県長崎」の確立に向け一層のお力添えを賜りますとともに、本日の成果を各地域において存分に発揮していただきますことをご期待申し上げます。

結びに、本大会のご成功と長崎県教育

会のさらなるご発展、並びにご列席の皆様方の今後益々のご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げます、お祝いのご挨拶いたします。



善行児童生徒の表彰



「夢・憧れ・志」最優秀作文の朗読

第三十回

「教育県長崎」振興大会

五島大会

【大会主題】

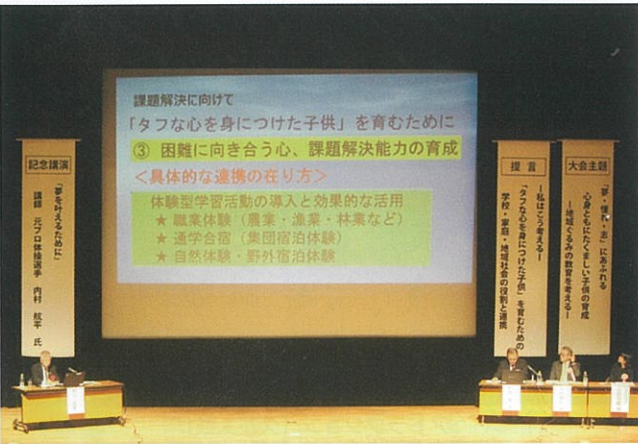
夢・憧れ・志にあふれる  
心身ともにたくましい  
子供の育成  
地域ぐるみの教育を考える

◆大会概要

去る十月二十八日、福江文化会館において、今年三十回目を迎えた「教育県長崎」振興大会を開催し、約四百五十名の皆様に御参加いただきました。

開会に先立ち、アトラクションとして、五島市立久賀小・中学校の児童生徒の皆さんに、同校伝統の「久が太鼓」を披露していただきました。息の合った太鼓の音が心地よく鳴り響き、会場全体が感動に包まれました。

第一部「開会行事」では、小田恒治理 会長による開会挨拶の後、県知事代理(副知事) 浦真樹 様、県議会議長代理(副議長) 山本由夫 様、五島市長代理(副市長) 久保実 様に御祝辞をいただきました。続いて、「善行児童生徒」並びに「私の『夢・憧れ・志』作文コンクール」最優秀賞の表彰が行われ、受賞生徒本人による心のこもった朗読で作文が披露されました。



第二部「記念講演」では、元プロ体操

選手で、本県が誇るオリンピックピック金メダリスト内村航平氏に、「夢を叶えるために」と題して御講演をいただきました。あれだけの輝かしい実績を残された方のお話を直接伺えるとおあって、会場には、学校やPTA等の関係者(大人)だけでなく、地元の子供たちや親子連れの姿もありました。(講演の様子については、九ページに掲載しています。)

そして、第三部「提言」では、五島市教育委員会教育長 村上富憲 様にコーディネートをお願いし、学校・家庭・地域を代表して三名のシンポジストに御登壇いただき、協議題に沿った貴重な御提言をいただきました。

◆提言(シンポジウム)

―私はこう考える―

【協議題】  
「タフな心を身につけた子供」を  
育むための学校・家庭・  
地域社会の役割と連携

今回の「提言」では、三名のシンポジストが、ふるさと五島の未来を担う子供たちのたくましい成長を願って、それぞれの立場で取り組んでおられることや相互の連携、今後の課題や展望等について熱く語られました。会場からも、地域の現状等を踏まえた建設的な意見や質問がなされ、協議題にふさわしいシンポジウムとなりました。

上郷小学校は、新上五島町の北部に位置し、「笑顔・夢・命きらめく上郷っ子」を教育目標としています。全校児童六十六名、純朴で人懐っこい子供たちが多い学校です。

上郷小では「タフな心を身につけた子供」を育むために、次の三つの視点から学校経営を行っています。

一つ目は、生活指導の観点から「基本的な生活習慣を身につけさせ、自己管理能力を育てること」です。心を届ける三つの「あ」として、毎月第一週目に「あいさつ」「あとかたづけ」「ありがとうなどの言葉づかい」の三項目について全児童に自己評価をさせ、結果を評価・分析し、改善を図っています。基本的な生活習慣はほぼ身につけておりますが、時に場に合った対応や自分で考え判断して行動できる子供が少ないことが課題だと感じています。

二つ目は、学習指導の観点から「基礎学力を定着させ、自ら学ぶ力・態度を育てること」です。「できることをできる時にできるだけの実践」を重点目標とし、「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりに取り組んでいます。特に、自分の思いや考えを進んで表現できる子供を育てる実践に力を注いでいます。複式学級の授業スタイルを活用し、学習のリーダーを中心に自分たちで授業を進める「ガイド学習」を取り入れ、学習の自立化をめざしています。基礎学力の定着は

タフな心を身につけた子供を  
育むための学校の取組

新上五島町立若松中央小学校

校長 松野 勲

提言予定者でありました上郷小学校 浦濱和彦校長先生が、事情により本日欠席されることとなりましたので、同校に勤務経験のある私が、代わって発表させていただきます。

比較的良好ですが、言語力や表現力、粘り強く学習に取り組む態度に個人差が見られます。

三つ目は、キャリア教育の観点から「自らの目標に向けて挑戦する向上心・忍耐力を育てること」です。重点目標を「やるき げんき こんき」の三つの「き」の推進と設定し、自分の将来の夢を「夢カード」に記入して掲示する「夢わくわく」コーナールの取組や、卒業生で夢を実現した方を講師に迎えてのトークセッションなどを行っています。

昨年の十二月末に、上郷小時代の教え子が中央小に勤務する私のところへ「警察官になる夢が実現しました。」と報告しに来てくれました。彼は、低学年の頃から夢カードに警察官になることを書き

続けていました。それが言霊となり、タフな心で夢に挑戦し続けたのだと思います。中央小でも昨年度三学期から、この夢カードに取り組んでいます。

私は、これら三つの視点に加えて、「自己肯定感の育成」が必要だと思えます。自分の良いところも悪いところもありのままの自分を認める感情を育むことが大切だからです。本町のキャリアパスポートには、「自己肯定感とは未来を創る原動力になる。」と書かれています。中央小では「大すきいっぱい」を学校教育目標とし、自己肯定感の育成を重点に取り組んでいます。

学校教育において、タフな子供の育成を難しくしていることがあります。それは、以前より子供たちに無理をさせないことを優先する傾向があることです。ある程度の壁を越える経験をさせることで、子供は成長します。例えば、持久走大会は、タフな心をも身につけさせる絶好の機会です。一人一人に目標タイムを設定させ、自己ベストに挑戦させる取組を教育活動に位置付ける必要があると思えます。

今後の課題と解決策として、まず、「発達段階に応じた自己管理能力の育成」のために、スマホやインターネットなどの情報メディアに係る諸問題の解決という観点から、家庭との連携が重要だと思えます。さらに「言語力、コミュニケーション能力の育成」については、地域社会と

連携し、学校とは別の集団、多種多様な人々との交流等を通して育てていきたいと考えています。また、「困難に向き合う心、課題解決能力の育成」を図るため、体験型学習活動を積極的に導入し、子供たちに意図的に困難な状況を経験させることで、耐性や自力解決の意識を高めたいて考えています。

学習や行事など全ての教育活動を通して、子供の心を「鍛える」こと、子供ががんばりや成長を「認める」ことを積み重ねながらタフな心をも身につけた子供を育てていきたいと思えます。

**レジリエンスを育む**  
 ～親子の共学～

五島市PTA連合会  
 代表 長置 美穂

〈家庭での取組 現状と課題〉  
「子育てが終わったときに、我が子や地域の子供たちが、周囲の大人たちのサポートがなくても生きていけるように支援をすること」

これは、県PTA連合会会長 松本光生氏から教わった考えで、PTAの役割や保護者のあるべき姿を示したものです。この考えを踏まえ、子供たちが安心して成長していける大人の役割はどんなことでしょうか。

親子の世代間で、社会構造や子育て環



境は大きく変化し、私たちが経験しなかった新たな諸問題が出てきています。私たちには、子が育つ環境を鑑み、共に学んでいく姿勢が必要です。

私は、レジリエンス＝心の免疫力に注目して、生活を振り返りました。レジリエンスとは、ストレスを受けた時の心の回復力のことです。基本的な生活習慣や自己効力感（自信）、愛情、自己肯定感、コミュニケーション、楽観性（ポジティブ思考）など多くの要素が関わっています。これらの中で、家庭で深く関わっている要素について考えてみました。

基本的な生活習慣において、規則正しい生活や食習慣、適度な運動習慣などは、すでに皆様が実践されている通りですが、第五のマスメディアといわれるWe

bメディアとの付き合い方が社会全体で問題となっております。スマホやゲーム、SNS等の長時間利用は、脳過労や睡眠障害等を引き起こし、健康や成長への悪影響があります。我が家では、テレビを週末に限定した視聴としたり、インターネットは調べ物や音楽鑑賞等に限定した利用とし、ゲーム機・スマホは使用しない等、Webメディアの利用時間を節約しています。また、図書館を利用し読書は積極的にして、週末に子供たちと新聞を読む時間をつくるなど、活字との関わりを意識して生活するようにしています。

子供の自己効力感・自信を育てるには、褒める・認めることが大切です。各家庭で皆様が実践されていることと思いますが、子供が活躍した写真を飾ったり、記録をしたりすることは、自己肯定感を高めるそうです。そして、自分の存在価値を認め、自分を大事に思う気持ちを育てるには、無条件褒めといわれる親の愛情が不可欠です。私は、一日のうち何度も子供たちとハグをして愛情表現をすることにしています。

その他、毎日の子供たちとのやり取りは、家族という小さなコミュニティでのコミュニケーション訓練ですし、楽観性やポジティブ思考には、親や教師など身近な大人の物事に対する考え方や姿勢などの環境要因が大きく影響します。私たちは、子供たちにその見本を示してい

なければなりません。

我が家の二男が、何事にもやる気を無くした時期を半年ほど過ごし、親子で悩んだ時がありました。何かチャレンジしてみようと最近サッカーを習い始めると、色々なことに受け身だった二男の行動は自発的になりました。時間を忘れて没頭するほどになりました。子供たちの志となり、憧れや夢につながり、前へ進む大きな力になるのだと思います。子供たちが夢中になれることを一緒に見つけていくことも、私たちがサポートできることだと思います。

〈今後必要な取組について〉

メディアの活用なしに現代の生活は成り立たなくなっている点や、高度情報化社会でICT教育を推し進めている点を踏まえて、今後は、情報をどのように取舍選択し、上手く活用していくかのメディアリテラシーが鍵であると思います。特にWebメディアの利用に関しては、親子で一緒に学んでいく必要があります。また、高度情報化社会でもデジタル化できないものが存在し、一方通行の多いメディアの活用だけでは育たないもの、ことばの発達や直接的な人とのつながり、コミュニケーションなどがあります。これらは、アナログ的に経験を積み重ねて体得していくものです。人とのつながりが希薄になっていく現代において、生身の人間との直接的な関わりや愉

しみについて、家庭や地域で積極的に取り組んでいきたいものです。そして、親子共々活字離れが進んでいます。読書には、知識が得られるだけでなく、想像力が高まる、思考力が身に付くなどのメリットが多くあり、この点も親子で取り組んでいきたいと思うところです。このような発表の機会を頂き、自身を振り返る転機となり大変勉強になりました。ありがとうございました。

**タフな子供の育成は  
家庭、学校、地域の連携**  
五島市青少年健全育成協議会  
副会長 吉田 隆正

今、私の子供夫婦を見ていると、世の中の子育て世代の方々を見ても、共働き、子供の習い事、学校行事への参加、社会情勢の変化に伴う事件・事故等の報道などの中、子育ては大変だと考えてしまっています。

まずは、私個人の地域活動といたしましては、中学校でバドミントンの外部コーチを約二十年いたしています。毎週土、日曜日と休日に子供たちと汗を流しています。最近では、休日の部活練習もかなり少なくなってきました。ほとんどの子供が、中学校へ入学してからバドミントンを始める子供たちですので、島外の子供たちとはかなりの力の差を感じ

ていました。バドミントンの練習は、持久力、瞬発力が基本的な練習になってきますので、子供たちには体力面、精神面で大変きつい練習になったと思います。しかし、子供たちはだんだんとバドミントンへの興味を感じはじめ、少しでも上手になりたい、少しでも強くになりたい、思い始めて練習に真剣に取り組みようになります。

子供たちに興味を持たせるためには、強く結果を求めず、まずは今取り組んでいることに、楽しみを感じさせることを考えて、外部コーチとして指導を行っています。日々、子供たちから元気をもらい、子供たちから成長させてもらっています。

また、私の紹介で五島市青少年健全育成



協議会の名前が出てまいりましたが、五島市育成協においてもタフな子供の育成事業といたしまして、様々な事業が毎年計画されております。ここ数年はコロナ感染症に対する自粛のため中止になっていましたが、今年から再度、計画実施されましたので、紹介したいと思います。

まずは、今年七月二十五日から二泊三日で奈留島宮の森総合公園において実施された、市内小学生交流宿泊体験学習事業です。参加者は市内小学六年生男子二十名、女子十一名、計三十一名でした。主な活動内容といたしまして、一 交流体験活動（班別交流、キャンプファイヤー）、二 自然体験活動（海水浴、シーカヤック）、三 生活体験活動（共同生活、調理体験）、四 しま体験活動（木工体験、マグロ解体見学、千畳敷見学）を行いながら集団での自然体験や生活体験を通して、豊かな人間性、社会性、たくましい心身の育成を図ります。また、自然や文化に親しみ郷土愛を育むことを目的として活動しています。二泊三日の体験ですが、参加した子供たちには、一生の大事なものになったことと思います。

次に、八月二十一日から三泊四日で行われました、中学生国内体験学習事業です。参加者は市内中学一年生の中から男子十一名、女子九名の二十名でした。活動内容は、見学研修といたしまして、EXPO70、大阪城の見学、大学交流といたしまして、近畿大学東大阪キャンパス



での大学生との交流会、大阪伝統芸能鑑賞といたしまして、なんばグランド花月の見学、地元五島市出身者企業訪問といたしまして、ユニクル株式会社訪問、舞い上げロケ地の東大阪市工場見学、人と防災未来センター見学等の体験活動を行い、子供たちは一人一人が様々な体験に感動し感謝していました。

部活動については現在、中学校部活動の地域移行が始まっています。これは公立中学校で行われている運動部の部活動を地域のスポーツクラブや民間企業、競技団体などに移行することです。その目的は、少子化による部員減少対策や教員の働き方改革に対応するためとなっておりますが、部活動の地域移行には、メリットやデメリットがあります。部活動の地

域移行を推進するためには、今後スポーツ環境の整備であったり、地域と学校の協働体制が必要になってまいります。部活動の地域移行は、今までの部活動とは異なりますので、多くの課題や調整等が必要になってまいります。

今後益々、五島市内は少子高齢化の一途をたどっていくことになってまいりますが、子供たちには五島で過ごした楽しい思い出と、五島で育んで頂いた気持ちを持って大人へと成長してほしいと思います。

タフな子供を育てるとは、親だけでなく地域全体で子供の成長を支える取り組みであり、子供は家庭だけでなく、学校や地域の人々とのふれあいを通じて、基本的な生活習慣や人間関係、倫理観や自立心などを身につけます。



シンポジウムの協議題は、「タフな心をも身につけた子供」を育むための学校・家庭・地域社会の役割と連携でした。

最初に五島の子供たちの様子から、タフな子供の育成が不十分な現状や、その背景について問題提起し、テーマに関わる課題を明確にしました。

その後、学校代表として新上五島町立

上郷小学校長 浦濱和彦氏（発表は、同若松中央小学校長 松野勲氏）、家庭代表は五島市PTA連合会 長置美穂氏、地域代表は、五島市青少年健全育成協議会 副会長 吉田隆正氏にお願いし、まず、それぞれの実践を発表頂きました。上郷小学校では、①生活指導の観点から②学習指導の観点から③キャリア教育の観点からタフな子供の育成に取り組んでいるという発表でした。長置氏からは、兄妹三人の子育ての喜びや大変さの実践発表がありました。吉田氏からは、中学校バドミントン部の長い指導や育成協関係の体験活動の充実を図ることで、遅しさを身につけている実践が発表されました。

その後、それぞれに対して、いくつか質問をし、実践の詳細を確認する中で、





今後の課題が焦点化され、その課題克服のための今後の取組について三人に再度発表を頂きました。長置氏からは、デジタル社会の中でもデジタル化できない読書など、アナログ的经验も重視して子供の成長に対応していきたいと発表がありました。今後も素敵な家族のあり方を模索してほしいと願います。吉田氏からは、少子化で学校統合、地域部活動移行や地域社会の希薄化などについての思いが語られました。課題は山積みですが、子供は地域の宝であることを忘れず、子供に子供たちに活力を与える活動をお願いしたいと思ひます。松野氏からは、「体験型学習活動」等の導入より、意図的に困難な状況を経験させ、耐性や自力解決意

識の向上を図っていくことが話されました。難しい面もありますが、重要なことなので、引き続き実践を継続してほしいと考えます。

最後に会場の意見も参考にしながら、シンポジウムのまとめを行いました。子供にとって楽な環境になってきたが、そのことはタフな心身につけた子供の育成を阻害している部分もあるのでは？そのような時代だからこそ、学校・家庭・地域社会が丸となって、五島の将来を支えるタフな心身を身につけた若者創りをしていく必要がある。

最後に、朝ドラ「舞いあがれ」の高峯ばんばの言葉、「舞、バラモン風のごと、どんな向かい風にも負けんとたくましく生るとぞ。」を復唱してシンポジウムを終えました。

**大会を振り返って**

五島大会実行委員長  
(五島市立富江小学校長)  
**坂本 憲司**

第三十回「教育県長崎」振興大会が、五島市で開催されました。離島で大きな大会を開催する際、荒天による交通機関の欠航が心配されます。当日はさわやかな秋晴れが広がり、御来賓・講師、新上五島町から御参加いただいた皆様をお迎えすることができ、一安心でした。御参

加いただいた約四百五十名の皆様に、心よりお礼申し上げます。



さんが受賞作文を朗読し、その内容の素晴らしさに会場中が引き込まれました。第Ⅱ部の記念講演では、内村航平氏に、「夢を叶えるために」という演題で御講演いただきました。「何かを成し遂げるためには、才能は関係ない。好きになり、死ぬ気でやるしかない。」といったストリートなメッセージが参観者の胸に響きました。講演を聴いていた小学生から高校生の子供たちも、「自分もこうなりたい」という「夢・憧れ・志」を強く抱いたことでしょう。

さて、本大会は、五島の子供たちを「夢・憧れ・志」にあふれ、心身ともにたくましく、タフに育てる」ことを目指して企画しました。「競い合いながらできるまで挑戦する」体験が減少し、「ひ弱さ」が気になる五島の子供たちを「タフに育てたい」という思いからスタートしました。アトラクションでは、久賀小中学校八名の子供たちが圧巻の「久(く)が太鼓」を披露し、会場に感動が広がりました。

第Ⅰ部の開会行事では、善行児童生徒表彰で、代表して五島市立盈進小学校と新上五島町立奈良尾中学校の二校が表彰を受けました。さらに、「私の『夢・憧れ・志』」作文コンクール」で最優秀賞(長崎県教育委員会教育長賞)を受賞した長崎大学教育学部附属中学校三年、潮崎夏鈴

第Ⅲ部の提言(シンポジウム)では、「タフな心身につけた子供」を育むための学校・家庭・地域社会の役割と連携」という協議題で、学校・家庭・地域代表の皆様がそれぞれの立場から実践をもとにした提言を行いました。コーディネーターの五島市教育長村上富憲様が御自身の思いも交えながら課題を焦点化され、的確に進行されました。協議を通して、少子化・統廃合が進む学校の現状、家庭でのメディアコントロールの大切さ、部活動指導等の問題が浮き彫りになり、参観者一人一人が「自分が何をすべきか」考えるきっかけになりました。

大会終了後、「素晴らしい大会だった。」「良い話を聞いた。」という嬉しい感想をたくさんいただきました。大会準備の苦労が報われました。

本大会に関わっていただいた多くの皆様に深く感謝申し上げます。

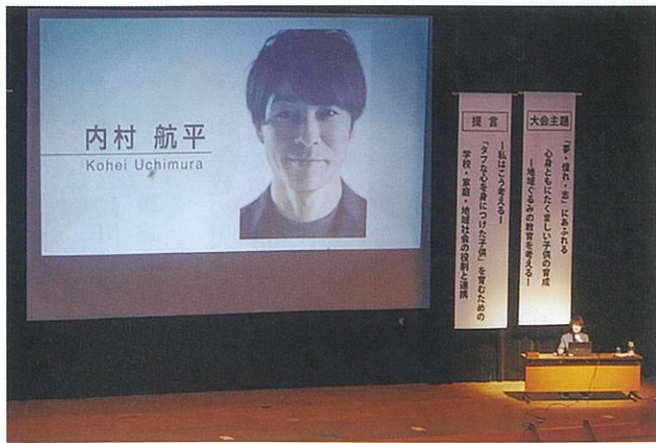
記念講演

夢を叶えるために

講師 元プロ体操選手 内村 航平 氏

今回の記念講演では、体操個人総合でオリンピック二連覇、世界選手権六連覇を成し遂げた体操界のレジェンド内村航平氏を講師にお招きしました。

幕が開くと、現役当時の美しい演技、見事に決まった鉄棒の着地の瞬間など、感動が蘇るシーンがスクリーンに映し出され、大きな拍手に迎えられてステージに内村氏が登場されました。例年掲載している講演の概要について



は、講師サイドの御意向により、掲載することができません。そこで、拝聴した感想と講演後半の質疑応答の内容を簡略に記します。

話の全体からは、三歳から始めた体操を大変な努力の積み重ねで継続してきた意志の強さと自信をひしひしと感じました。

講演のまとめとして話された言葉、「**出来ないではなく、どうやったら出来るか、考えてほしい。**」これは、コロナ禍の中、東京オリンピック開催の是非が問われたときの内村氏のコメントの一部として、ご存じの方もおられることでしょうか。簡単にあきらめるのではなく、あくまでも前向きに物事を考えることの大切さと、それに立ち向かう勇気を感じます。

また、最後に、大人へのメッセージとして、「**期待するな。**」という言葉がありました。周りが期待し過ぎないことで、のびのびと好きなことを追求できる。子供たちにもあまり期待し過ぎず、優しく見守ってほしい。会場にいる全ての大人が肝に銘じたことと思います。

「本物は続く、続けると本物になる。」という言葉を実感させられた講演でした。

質疑応答より

講演後半の質問コーナーでは、大人はもとより小中学生からも質問があり、一つ一つ丁寧に答えてくださいました。



Q 体操を諦めそうになったことは？

一度も無いと思う、特に小さい頃は。それは好きだったから。大人になって両肩を痛めたときは諦めかけた。しかし、コーチが「できるはずですよ」と声をかけてくれた。温かく、見守り、励ましてくれた。諦めかけている人には、自分の価値観だけでなく、その人に合った声かけが大切だと思う。

Q 本県の子供たちは柔軟性に課題がある。柔軟性を高めるには？

具体的な方法はない。お風呂上がりは

筋肉がほぐれている状態なので、柔軟体操はその時がよい。急激には変わらないが、継続していくことが大切だと思う。だけど、柔軟性がそれほど大切ですか？実は僕も固い方です。他に強みがあれば、そこを生かしてほしい。

Q 不登校で悩んでいる生徒へ声をかけるとしたら？

学校以外のことで、自分の好きなことや楽しいことを、とことんやってよいのではないか。自分自身が前向きになれることをやっている、それがマックスになり、登校しようかなと思えるようになるかもしれない。人は、下を向いてばかりで生きていけない動物ではないと思っている。

参加者の感想(アンケート)から

- スポーツをさせている親として内村さんの言葉は刺さるものがありました。
- 内村航平さんの実体験に基づいた話は本当に貴重で、説得力がありました。
- 内村航平さんの講演は、とてもよかったです。死ぬ気で頑張った人の言葉は重みがありました。
- 内村航平さんのような夢を叶えた方のお話を聞けたことは、とても勉強になりました、そして面白かったです。

夢に向かって、勇気を与えてくださった内村氏に心より感謝申し上げます。